研究発表要旨

ジャック・ロンドンの闘争と現代的意義

芳川　敏博（元京都府立高等学校教諭）

ジャック・ロンドンは一般的に唯物主義者であると言われている。しかし彼は、激動の時代を精一杯生きた複雑な人物で、本質は精神主義者である。文学的特徴や文学作品を参考にしながら、外向きの闘争と内向きの闘争という観点を導入していろいろな闘争を紹介し、ロンドンの現代的意義を考察した。

家庭的な環境や大不況の格差社会のために、ロンドンの少年時代や青年時代は、唯物主義的な外向きの闘争が主であったが、一定の地位と富を手に入れた後の晩年には精神的な内向きの闘争に苦しんだ。１）物質的闘争、２）作家としての闘争、３）肉体的闘争、４）精神的闘争、５）死との闘争

ロンドンの文学的特徴も彼の生きた時代や彼の生き方を反映して、変化に富むもので複雑である。１）ロマンティシズムからリアリズムへ、２）男性重視から女性重視へ、３）英雄待望から庶民重視へ、４）偏見から国際的アピールへ、５）テーマの二重性、６）唯物主義から精神主義へ

ロンドンの作品の中に闘争の変化や例を探ると、外向きの闘争として、作家としての闘争：『野性の呼び声』と物質的な闘争：『アメリカ浮浪記』がある。また、外向きの闘争から内向きの闘争に変化する転機になった闘争の作品として、「ひと切れのビフテキ」がある。この作品は３３歳の時の作品で、自分自身もそれまで体力には自信があったが病気で体力の限界を知り、老化に初めて気がつく。ロンドンは、主人公のキングを通して人生と老化を考えている。

さらに内向きの闘争として、精神の闘争：『ジョン・バーリコーン』と死との闘争：『星を駆ける者』がある。『ジョン・バーリコーン』は１９１３年、ロンドンが３７歳の時の作品である。飲酒体験が自伝小説風に大半が語られており、禁酒法制定の先駆的役割を果たしたが、この作品の真のテーマは、悲観主義と死である。冒険とロマンと飲酒体験という、単に表面的な体験を語っているのではなく、内面的な苦悩もリアルに描写しておりロンドンの人と作品を理解するうえでも重要な作品である。

『星を駆ける者』は１９１４年、ロンドンが３８歳の時の作品である。この作品は、前年８月のウルフ・ハウス（４階建ての豪邸）の焼失のころから書き始め、４月に完成した。この小説は単に死刑制度に代表される人間の残忍性や、肉体からの離脱方法のような「闘い」を説いただけのものではなく、ロンドンが生涯を通じて追求した「世界を支配する真理」を描いている。そこには、永遠不滅の精神性・愛の賛歌がある。また、この作品は、ロンドンの作品と生涯の総まとめであり、物質と精神、科学と哲学、現世と死後の世界を

統合するものであり、彼の優れた作品の一つであり、遺言でもある。

人間としての本質は晩年に現れると思うので、ロンドンの現代的意義も内向きの闘争から生まれた精神的なもので、時と空間を超えた普遍的な価値観である。

Ａ：ロンドンの人としての現代的意義

１）人間への信頼（いろいろな人との交流）：物質的な満足ではなく、精神的な満足が大切で、自己中心的な考えではなく、みんなと協調することが大切である。人間には生きる意味がある。

２）自然環境保護（広大な自然が残るジャック・ロンドン農園）：人間が宇宙、そして地球の一員であるということを理解して、海や森、植物、他の動物、水、土壌、空気を大切にする。

３）逆境からの自立（どん底の生活から世界一の高給取り作家へ）：ピンチをチャンスに変えて、決してあきらめない不屈の精神と肉体とその維持が大切である。

Ｂ：ロンドンの作品の現代的意義

１）普遍的な問題提起：死とは何か。人生をいかに有意義に生きるか。

２）多くの国際的読者の獲得：国境を越えて、人との関わりを通じて、後生にいかに自分の生きた意味を伝えるか。

ロンドンは、激動の時代を生き抜き、やっと「千の風になって」私たちを見守っている。彼が１９０３年に述べた言葉を紹介する。「人生で大切なものを４つ挙げるとすれば、それは健康、仕事、人生哲学、そして、誠実であるということです。その中で最も重要なものは、誠実であるということです。」このことは、彼の本質は唯物主義にあるのではなく、人間としての精神的な価値にある、ということを示している。その偉大さは、矛盾だらけの無秩序な激動の時代を、理想を忘れず勇敢に生き、世の中や人生の重要問題、そして、人間をリアルに描きだし、世界中の人びとに、再考を促していることだと思う。

時空を超えて、ロンドンは、星を駆け巡り、私たちに多くのことを語りかけているように思える。４０年間という短い生涯であったが、人一倍の好奇心と冒険心を持って、よりよく生きるための真理を追求した。彼の有名な言葉である、“ The proper function of man is to live, not to exist. ”がそれをよく物語る。１００年前の彼の時代に起こったことが、現代でも根本では共通している場合が多く、彼の生涯や作品の奥に隠されている真の教訓を理解し、今日、人間と地球に起こっている危機的な状況を克服するために行動したい。２１世紀が、「孤独な本能の社会」ではなく、「楽しく人間や動物・植物が共生し、美しい地球」になるように行動したいものである。